

台南県後壁郷土溝村における社区营造の取り組み

— 健康的な社会環境づくりの視点から —

Case study of community in Togo village, Taiwan

— A study from Health Promotion Activity —

高橋 和文¹

Kazufumi TAKAHASHI

岩崎公弥子²

Kumiko IWAZAKI

小室 達章²

Tatsuaki KOMURO

時岡 新¹

Arata TOKIOKA

後藤 昌人²

Masato GOTO

中田 平²

Hitoshi NAKATA

1. はじめに

台湾の参加型まちづくりは、「社区营造」や「社区総体营造」といわれる。「社区」とはコミュニティを意味し、「营造」とは建物や空間を建設することを意味する。また、ソフトウェアを「营」、ハードウェアを「造」という言葉であらわすことで、社区総体营造とは、「社区の共同意識や組織づくりなどのソフトウェアの『経営』、公共空間や施設、住宅などハードウェアの『建設』、さらに社区未来の『創造』などを合わせて指す言葉」として用いられている（2005年度第6回都市環境デザインセミナー記録）。この社区総体营造は、1994年10月3日に、行政院文化建設委員会が立法院で提唱した。文化建設委員会によると、社区総体营造とは、「社区意識の再醸成によって国民の共同体意識を育て、時代の流れや外部環境に対応する」ことであるとされる。その後、2001年に策定された「社区文化再造計画実施要点」によって、中央政府の補助金を得ながら、県政府が主体となっ

て、社区総体营造が実施できるようになった。つまり、地方政府に対する社区総体营造の予算が制度化されることで、コミュニティ政策の地方分権化が推し進められたとされる（星、2008）。2002年から2007年までは、文化建設委員会が提唱した「新故郷社区营造」が実行された。「挑戦2008：国家発展重点計画」の推進に合わせて、「新故郷社区营造計画」を打ち出し、「独自の文化・伝統、景観環境、地方産業を融合し、地方の魅力の向上につなげる」政策が実行された。2008年から2013年までは、「新故郷社区营造第二期計画」が提唱され、文化活動への参加による地域創造の具現化に向けた地域住民主体のまちづくりや公共活動が実施されている（行政院文化建設委員会）。このように台湾における社区营造は、地域と住民のアイデンティティを高める手段として、社区の文化的特長を生かしたまちづくりの推進であるといえよう。

一方、住民が住みよい環境作りに主体的に取り組む、いわゆる健康的な社会環境づくり

¹ 金城学院大学現代文化学部コミュニティ福祉学科

Department of Community and Social Work, College of Contemporary Society and Culture, Kinjo Gakuin University

² 金城学院大学現代文化学部情報文化学科

Department of Information Culture, College of Contemporary Society and Culture, Kinjo Gakuin University

は、「命を守ることが出来る自然環境や他人への関心・思いやり、共感できる人間関係、生きがいを見つけそれを感じられる人的物的環境が存在する」取り組みである（長弘ほか、2003）。また、長弘らによると、このまちづくりが成立する前提条件は、「ある程度のみとまり、拠点、他者を受け入れる姿勢が必要」とされ、その必須条件は、「日常生活を基盤としている活動であることが重要であり、高齢者や青少年、留学生など弱者的な存在の人たちの生活、教育、健康のすべての面にかかわっていること」と考えられている。

本研究プロジェクト^(注1)は、台南県各地の参加型まちづくりを調査したものであるが、この報告では、健康的な社会環境づくりの視点から、「新故郷社区营造」の成果として、後壁郷土溝村における社区营造の取り組みを紹介することとする。

2. 対象と方法

研究プロジェクトの調査対象とした台南県は、台湾の南西部に位置しており、北は嘉義県嘉義市、南は台南市と高雄県に接している。台湾には、25の行政区分^(注2)が存在しており、この中で台南県は、トータル面積が2016平方キロメートルで第9位、耕地面積は9万余ヘクタールで第1位、人口は約110万人で第8位とされる（台南県政府公式ホームページ）。また、台南県には、2市7鎮22郷のあわせて31の行政区分が存在している。県政府の所在地は、新営市である。台南県の主な産業は、農業・林業・漁業であったが、近年は、南部科学工業園区や柳営科技工業区を

開発し（ソーラーパネルなどを製造）、商工業を中心とした産業構造に転換してきている。

土溝村は、台南県の最北に位置する後壁郷にあって、人口は1712人、458戸からなる（2005年12月）。台南県文化観光サイトによると、「後壁郷には21の村があり、土溝村は郷の総面積の十分の一を占めます。村内のほとんどは農地で、時間がゆっくりと流れ、素朴な暮らしが営まれています。文化団体は、緑化、美化という理念により、居住環境を改善し、遊んでいた空間を地域の公共施設にしました。地域整備の事業は、土溝村の伝統的な農村文化の伝承や発揚に役立っています。」と紹介されている。

研究プロジェクトの調査期間は、2010年10月21日～24日の4日間であり、後壁郷土溝村の調査は、23日におこなった。調査方法は、王大玉氏（台南県政府新大同社会造営中心）の案内のもと、社区营造を取りまとめる張佳恵氏（台南県土溝農村文化造営協会、土溝村長 常務理事）に、現地ガイドの通訳を介した聞き取り調査をおこなった。

3. 結果

(1) 後壁郷土溝村における「土溝最後一頭水牛」と「水水的夢」の取り組み

土溝村が一躍脚光を浴びたのが、2004年の「土溝最後一頭水牛」の取り組みであった。この取り組みは、かつての土溝村では当前のように飼われていた水牛（全盛期には300頭以上）が、村で最後の1頭となったことに端を発する。最後の1頭となった水牛を

^(注1) 本研究は、金城学院大学人文・社会科学研究所の研究助成を受けたプロジェクト（研究代表者：小室達章）として実施した。詳しくは、金城学院大学人文・社会科学研究所報（2011）第16号、47-57：「産学連携・住民参加による地域活性化：国内外のヒアリング調査から」を参照。

^(注2) 台湾の行政区分は、第一級行政区分の2直轄市と第二級行政区分の5省轄市ならびに18県に区分されている。台南県は、18県の一つに数えられる。なお、台南県は、2010年12月25日に台南市へ統合されるため、これらの行政区分も大きく変更されることになる。（2010年10月現在）

台南県後壁郷土溝村における社区营造の取り組み（高橋和文，小室達章，後藤昌人，岩崎公弥子，時岡新，中田平）

使って伝統的な農業を営む清秀伯氏（当時79歳）に，地元住民と台南芸術大学などの学生が協力して，新しい牛舎を建造した取り組みである。こだわりは，牛舎を土塼造り^(注3)で建造したことである。土塼造りの家屋は，日本統治時代の資料（鈴木，1936）にも，「本島人（=台湾人）家屋の大多数は土塼造りである。」との記載があることから，1900年代初期に台湾で一般的に見られた家屋の構造である。ただし，この資料によると，土塼造りの家屋は，木造家屋に比べて，耐震構造に劣ることが記されている。土溝村の新牛舎

の建造に際しても，1999年に発生した921地震^(注4)のような大規模な地震に耐えられるのかという危惧もあった。しかしながら，水牛との親密性や伝統的な精神を尊重するためにも，土溝村では，土塼造りの牛舎にこだわった。学生と社区住民たちは，1年以上の時間をかけて，牛舎の設計から土塼の制作，そして，牛舎の建造を手作りでおこなった。この過程は，「水牛起厝」（写真1）としてまとめられ，新聞にも紹介（写真2）されている。王大玉氏によると，この社区の取り組みは，台南県の中でも最も成功した事例であるとの



写真1 水牛起厝



写真3 土溝農村文化学堂の外観



写真2 本を紹介する新聞記事
（美麗農村togo土溝的文化學堂より引用）



写真4 土溝農村文化学堂の内部

(注3) 土塼とは，「粘土を水にてよくこねこねの中に藁苜を入れ，それに水牛を歩ませて十分に練った上これを35×25×10cm位の木型に入れて日光を曝らし乾かしたものである」とされる（鈴木，1936）。

(注4) 921地震とは，1999年9月21日に発生したM6.8の大規模な地震である。震源地は，南投縣集集镇であったことから，日本では，集集大地震や台湾大地震と呼ばれている。

ことであった。また、張佳恵氏によると、現在、最後の1頭であった水牛は、すでに死んでしまったものの、水牛を中心にまとまった社区の人々つながりは、根強いものがあるという。

学生と社区住民たちが拠点としたのは、かつての家畜小屋を自らの手で改築した土溝農村文化学堂(写真3)であった。土溝農村文化学堂は、社区住民が集まって話し合いをできるように、十分な座席とプロジェクトが設置されている(写真4)。椅子と机は、台南県後壁国民小学校で使用されていたものを再

利用していた。また、内部には、大型の調理場も併設されており、大人数の食事を準備できる環境が整っていた(写真5)。

土溝村は、「土溝最後一頭水牛」で成果を上げた後、新たに「水水的夢」の取り組みを開始している。「水水的夢」は、日本の源兵衛川^(注5)をモデルにしており、地域の河川や田畑の水環境を改善して、住民が遊んだり、歩いたり、生き物にふれあえるような環境を取り戻すための取り組みである。日本人の専門家2人もこの取り組みに関わっており、地元住民や大学生から厚い信頼を得ているとの



写真5 大型の調理場



写真7 水水的夢を紹介したパネル



写真6 調理場の壁一面に描かれた絵



写真8 パネルを紹介する地元の大学院生

(注5) 源兵衛川は、静岡県三島市に流れる河で、平成の名水百選にも認定されている。疎水名鑑によると、源兵衛川は、「高度経済成長期の工場の地下水汲み上げによって湧水が激減し、ゴミ捨て場と化した川を、住民参加型の事業手法によって『都市と農村を結ぶ水の道』として整備した」とされる。源兵衛川の市民参加による環境づくりは、日本の研究者によって多くの報告がなされている(吉原ほか, 1997; 加藤ほか, 1999; 渡辺, 2003; 岡村, 2003など)。

ことであった。張佳恵氏は、「お金があるならば、水環境をもっと改善したい。しかし、今はその段階ではない。まずは、住民の意識が変わらなければならない」と話していた。現在のところ、「水水の夢」の成果は、拠点となる公園を自らの手で整備したり、河川の清掃などをおこなっている段階である。その様子は、拠点となる公園にパネルとして展示されている。パネルには、地元住民の手で、廃墟となっていた家屋の屋根を改修する様子や、公園の芝を植える様子、理想とする源兵衛川の写真、将来の河川を描いた色鮮やかな絵が展示されている。土溝村は、「水水の夢」の実現に向けた取り組みの途中である。



写真9 拠点となる公園



写真10 現在の川の様子

4. 考察

土溝村の社区造営では、「土溝最後一頭水牛」を実施し、現在は「水水の夢」に取り組んでいる。ここでは、まず、健康的な社会環境づくりの視点から、「土溝最後一頭水牛」についての考察をおこなう。

長弘（2003）によると、まちづくりが成立する前提条件には、①ある程度のまとまり、②拠点、③他者を受け入れる姿勢が必要とされるが、これを土溝村の社区造営にあてはめると、表1のようになる。つまり、①ある程度のまとまりは土溝村の社区住民であり、②拠点は土溝村文化学堂、③他者を受け入れる姿勢は台南芸術大学の学生を受け入れたことといえる。また、②拠点となる土溝農村文化学堂は、かつての家畜小屋だった建物を、社区住民が自らの手で改築したものである。これらの成果から、前提条件①としての土溝村の社区住民には、「土溝最後一頭水牛」に取り組む以前から、ある程度のまとまりや連帯感が備わっていたものと推察される。

表1 まちづくりが成立する前提条件を土溝村にあてはめた場合

前提条件	土溝村における前提条件
① ある程度のまとまり	土溝村の社区住民
② 拠点	土溝農村文化学堂
③ 他者を受け入れる姿勢	台南芸術大学の学生など

まちづくりが成立する必須条件は、①日常生活を基盤とした活動、②弱者的な存在の人たち（高齢者や青少年、留学生など）の生活、教育、健康のすべての面にかかわっていることとされ、これを土溝村の社区造営にあてはめると、表2のようになる。つまり、①日常生活を基盤とした活動とは、土溝村の中心産業である農業に関わる取り組みであり、②高齢者の生活とは、水牛による伝統農業を守り続けてきた老人の存在、さらに青少年

の教育とは、台南芸術大学生の学びがあてはまる。学生たちは、土塙造りという伝統的な建築技術を復活させることに成功し、牛舎の建設に取り組んだ。土塙造りへの挑戦は、伝統的な農業を営んできた老人の生活を活性化し、地元住民にとっては牛舎の建設を通じた学び(=教育)をもたらした。

表2 まちづくりが成立する必須条件を土溝村にあてはめた場合

必須条件	土溝村における必須条件
① 日常生活を基盤とした活動	土溝村は農業を中心とした村
②-1 高齢者の生活	水牛による伝統的農業
②-2 青少年の教育	台南芸術大学生の学び

すなわち、「土溝最後一頭水牛」を時系列で捉えると、土溝村は、まちづくりに必要な前提条件を整えていたところに、地元住民と大学生が土塙造りに挑戦することで、必須条件に関わる生活や教育を高めながら、社区造営(=まちづくり)を形成してきたと理解できる。そして、健康的な社会環境づくりには、「他人への関心・思いやり、共感できる人間関係」が必要とされるが、地元住民と大学生は、村で1頭になった水牛への「関心・思いやり」とその飼い主である老人へ「共感」をし、土塙造りへの挑戦を通して「生きがい」とも言うべき経験をえていたものと理解できる。

つぎに、土溝村が現在おこなっている「水水的夢」への取り組みを検討する。すでに述べたように、土溝村は、まちづくりに必要な前提条件(表1)を整えている。これに、「水水的夢」の前提条件を加えると表3のようになる。つまり、②には拠点となる公園が、③には日本人の専門家などが加えられる。

表3 まちづくりが成立する前提条件を「水水的夢」にあてはめた場合

前提条件	土溝村における前提条件
① ある程度のまとまり	土溝村の社区住民
② 拠点	土溝農村文化学堂、拠点となる公園
③ 他者を受け入れる姿勢	台南芸術大学の学生、日本人の専門家

表2に示したまちづくりに必要な必須条件に、「水水的夢」の必須条件を加えると表4のようになる。①には、生活基盤としてのきれいな水、②には生活に密着する農業や遊び場としての水・水辺、さらには学び場としての水辺があてはまる。しかしながら、張佳恵氏は、住民意識のさらなる向上の必要性も話してくれた。張佳恵氏のいう住民意識の向上とは、結果の項でも述べたように、河川や水辺環境を住民自らの手で改善して、より美しい環境を整える意識の向上である。モデルとなる源兵衛川の取り組みを見てもわかるように、きれいな水辺の構築は、一過性の取り組みでは終わらない。「水水的夢」が成功するためには、水辺への継続した学びと関心をもって、粘り強い取り組みが求められる。

表4 まちづくりが成立する必須条件を「水水的夢」にあてはめた場合

必須条件	土溝村における必須条件
① 日常生活を基盤とした活動	生活基盤としてのきれいな水
②-1 高齢者・青少年の生活	農業や遊び場としての水・水辺
②-2 高齢者・青少年の教育	台南芸術大学生の学び 水辺の生物への関心 きれいな水辺を維持する意識

5. おわりに

本研究プロジェクトは、台南県各地の参加型まちづくりを調査したものであるが、この

報告では、健康的な社会環境づくりの視点から、後壁郷土溝村における社区营造の取り組みを紹介した。「土溝最後一頭水牛」では、村で最後の1頭となった水牛の壊れた牛舎を再建することに際し、社区住民と近隣大学が連携することで、社区住民の連帯感が高まった。その連帯感は、「水水的夢」へと引き継がれ、生活や農業で使用する水と水辺環境の改善に対する取り組みへと発展している。そして、考察の項で述べたように、これらの取り組みは、健康的なまちづくりに欠かすことのできない前提条件と必須条件を満たしていることも理解できた。ヘルスプロモーションの視点とまちづくりに関して、猪野（1995）は、『『どのように暮らしたいか』『どんな街だったらいいか』という生活の目標を皆でイメージし、そのための条件づくりを行い、住民参加型で健康と福祉のまちづくりをすすめること』と述べている。台湾は、様々な事情によりWHOに加盟はしていない（できない）が、土溝村での取り組みは、まさに、WHOが提唱するヘルスプロモーションの視点を含んだものといえよう。社区营造の新故郷運動が、生まれ育った土地へのアイデンティティを高める手段として実施されているのであれば、今後の研究では、土溝村での継続的な取り組みが、社区住民の故郷に対するアイデンティティ（想い）に及ぼす影響についても調査したいものである。

引用・参考文献

- ・ 亜洲奈みずほ（2003）現代台湾を知るための60章。明石書店。東京。
- ・ 猪野正一（1996）住民参加で健康と福祉のまちづくり。公衆衛生情報26（2）。14-16。
- ・ 加藤正之、岡村晶義（1999）源兵衛川・暮らしの水辺。建築雑誌114。92-93。
- ・ 小室達章、後藤昌人、岩崎公弥子、中田平、高橋和文、時岡新（2011）産学連携・住民参加

による地域活性化：国内外のヒアリング調査から。金城学院大学人文・社会研究所報。第16号。47-57。

- ・ 星純子（2008）現代台湾コミュニティ運動の地方社会における卓越化と地方文化の実体化政策－社区総体营造再考－。アジア太平洋レビュー。第5号。15-26。
- ・ 長弘千恵、山川里美、馬場みちえ（2003）公民館を拠点とした誰もが住みよい健康的な社会環境づくりの成立要因。九州大学医学部保健学科紀要。第2号。25-36。
- ・ 岡村晶義（2003）市民参加による水辺の環境づくり：三島市源兵衛川・よみがえる暮らしの水辺。農村計画学会誌。22（3）。219-224。
- ・ 司馬遼太郎（2009）街道をゆく40〈新装版〉台湾紀行。朝日文庫。東京。
- ・ 周婉窈（著）、濱島敦俊（監訳）、石川豪、中西美貴（訳）（2007）図説台湾の歴史。平凡社。東京。
- ・ 鈴木武夫（1936）土垠造家屋の耐震度。東京帝国大学地震研究所地震研究所彙報別冊。第3号。110-119。
- ・ 渡辺豊博（2003）三島市・源兵衛川はどうよみがえったか「川の再生」は人を、町を変える。望星。34（2）。31-36。
- ・ 吉原タケル、中村光隆、鈴木信宏（1997）三島市源兵衛川に対する施策と悪影響及び解決策の調査研究。日本建築学会技術報告集。5。210-213。
- ・ 土溝農村文化营造協会（発行）（2005）水牛起厝。土溝農村文化营造協会。台湾。
- ・ 台南縣政府新聞處（編印）（2008）愛與希望 台南新故郷運動。台南縣政府新聞處。台湾。

引用・参考URL

- ・ 2005年度第6回都市環境デザインセミナー記録「台湾の参加型まちづくりと震災復興について」<http://www.gakugei-pub.jp/judi/seminars0506/index.htm>
- ・ 行政院文化建設委員会 <http://www.cca.gov.tw/main.do?method=find>
- ・ 台南縣政府 <http://www.tainan.gov.tw/jap/index.aspx#>
- ・ 南瀛の旅 台南県文化観光サイト <http://tour.tnc.gov.tw/jp/index.php>

- 台南藝術大學建築藝術研究所 社區營造組
<http://203.71.54.91/04research/research%20community.htm>
- 南部科学工業園區 <http://www.stsipa.gov.tw/web/indexGroups?frontTarget=JAPAN>
- 行政院農業委員會林務局 <http://www.forest.gov.tw/mp.asp?mp=4>
- 美麗農村togo土溝的文化學堂 <http://tw.myblog.yahoo.com/jw!QC66WliGHxDRyAzNHTC/>
- 土木学会図書館 八田與一 http://library.jsce.or.jp/Image_DB/human/hatta/hatta_profile.htm
- 疎水名鑑－源兵衛川－ http://www.inakajin.or.jp/sosui_old/index.html